

# 小学校説明文教材の構造と表現に関する基礎的研究(5)

\* 遠 藤 仁

Fundamental study about the style of editorial in an elementary school (5)

ENDO Hitoshi

## 要 旨

本稿では、小学校国語科説明文教材「千年の釘にいどむ」(国語 五 銀河、光村図書)を素材として、異色とも言うべき詳述的な文章を支える語句や表現の計量的観察を通じて、漠然としたイメージでとらえられることの多い文体的性格をいかに客観性をもたせてとらえなおすことができるか、今後の実践的研究に備え、語学的側面から考える問題点と課題とを整理しようとするものである。

**Key words :** 国語科教材、説明文、ドキュメンタリー、展開、表現、読み

## 0. はじめに

文章の味わいという、美的な和語の使い方が上手で、やわらかくゆったりとしたリズムをもつ文章だとか、論理的で漢語が多く硬い調子をもつ文章だとか、なんとなく漠然としたイメージで語られることが多い。しかし、それは決して不正確であったり、非科学的であったりするわけではなく、むしろその文章の性格を直截に言い当てている場合も多い。本稿では、光村図書「国語」所載の「千年の釘にいどむ」を素材として、主として書き手側の視点から、文章の組成を計量的にとらえなおすことによって文体的性格の一端を明らかにしていきたい。

## 1. 表現対象と表現の方法

「新編新しい国語二下」(東京書籍)で長年親しまれてきた教材「ビーバーの大工事」に「みきの回りが五十センチメートルいじょうもある木がドシーンと地ひびきを立ててたおれます。」というくだりがある。「五十」という数値や「ドシーンと地ひびきを立てて」

などの表現から、読み手に対して相当に太く大きな木であるような印象を与えるが、実際には教科書の写真にも見られるような直径16センチほどの木をそのように描写しているのである。円周率は第5学年の学習事項であるから、2年生の時点でこの文章表現から得られる事実は、まさにイメージにほかならない。なぜ、このような表現方法がとられたのか。ビーバーの行動に即して考えてみれば、ビーバーは丸い木の表面に沿って「まるで、大工さんのつかうのみのよう」な歯で「上あごの歯を木のみきに当ててささえにし、下あごのするどい歯で、」「五十センチメートルいじょうもある木」を「ぐいぐいとかじって」いくのであるから、直径を示すよりは、「みきの回り」で表現する方が、児童はビーバーの行動と木の太さをリアルにイメージ化しやすいとの計算が働いたのであろう。

このような場合、大人であれば木の太さ(直径)をもって客観的に把握することが可能である。なぜなら経験的に多くの木を見てきているため、太さの表示にもとづいて木の大きさを類推できるからである。樹種によっても異なるだろうが、例えばスギでは胸高直径が16センチほどもあれば、樹高は15メートル前後にも達す

\* 初等教育教員養成課程子ども文化コース

るので、「ビーバーの大工事」にある「ドシーンと地ひびきを立てて」との叙述は決して誇張ではないことがわかる。またビーバーの体格も勘案するなら、論理的に木の幹の直径や樹高を示すよりは、行動描写に即した叙述の方が、安全な巣作りの大変さをよりイメージ化しやすいともいえる。説明的文章は、基本的には客観的かつ正確な叙述を旨とするも、読み手の発達段階、伝えようとする内容と目的、表現効果などに応じて、書き手が話材をどのように取り立てるかという問題がまずあるように思われる。このことは読み手に即していえば、必要な情報を取捨選択したり、内容のみならず表現の意図を理解したり、叙述のよさを味わったりするなど、多様な読む力を求められているのである。

## 2. 「千年の釘にいどむ」の計量的把握

さて、児童に向けた読み物がわかりやすい背景には、発達段階が低いほど詳述を避ける傾向があげられるだろう。修飾語が少ない分、文は短く、理解しやすくなるうえ、絵や図版・写真が相補的に用いられることも多い。発達段階が低いほど文脈から類推させることは難しいため、おのずと記述は具体的となろう。数量的表現も、発達段階が低いほど具体的な数字を避け、副詞、特にオノマトペで感覚的に表現することが多いとの特徴も指摘できる。語りかけ、問いかけの表現が多いことも、単に親しみをもたせるのみならず、「問いと答え」という説明的・論説的文章では、読み取りの指標とされる形式を仕組むうえで都合がよい。こうした一般的な特徴のいくつかは「千年の釘にいどむ」でも踏まえられている。ただ、「千年の釘にいどむ」は、指導の系統性からすれば、説明的文章の流れに位置するものではなく、あくまで発展的な読書につなげるべく、お話しの面白さを感じ考えながら読ませることが意図されている。学習のてびきにおいても「『千年の釘にいどむ』にいた内容や、にた表現の文章を、今までに読んだことがあるだろうか。それは、どんな文章で、どんなところがにていたのだろうか。」とあることから明白である。同じように優れた素材をいくつか挙示しながら実証的に継承(伝承)することの大切さを説くものとしては、東京書籍『新編 新しい国語 2』所収の「鯉節—世界に誇る伝統食」(小泉武夫)など、中学校国語科の学習材が想起される。挿絵を効果的に

採用しながら段落相互の関係、論理展開が分かりやすくなるように工夫されている点なども「千年の釘にいどむ」とは軌を一にするものといえよう。同じ5年生の教材で、東京書籍『新しい国語 五』所収の「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」(中山圭子)のように、学習の目的は異にしながらも、日本の伝統文化という大きなくりにおいて、伝統的和菓子とその歴史、和菓子職人と職人に求められる素養、和菓子を享受し支える人について類似した構造の文章にまとめたものもある。

さて、「千年の釘にいどむ」本文は2500字弱からなる文章であるが、合成語や漢語サ変動詞などは1語とみなす大きめの単位の取り方をして語数は1,235語、うち542語(44%)は付属語が占めている。以下では樺島忠夫・寿岳章子(1965)の提唱する計量的手法により、本文の特性を数理統計的な側面から概観することにした。この方法は、決して新しいものではないが、文章を構成する語句や表現にかかわる様々な項目にバランスよく目配りしており、公表されているデータの大半が文学作品を中心とするものとはいいながらも、文体的性格の側面をよく示しているものと判断されるからである。

さて、自立語693語の内訳は下表の通りとなる。品詞分類にかかわる基本的な考え方は、樺島らにならない岩波国語辞典品詞概説によった。

品 詞	語数	%
名 詞	355	51.2
動 詞	227	32.8
形 容 詞	31	4.5
形 容 動 詞	11	1.6
副 詞	34	4.9
連 体 詞	17	2.5
接 続 詞	16	2.3
感 動 詞	2	0.3
自 立 語	693	100

以下、比較の都合もあり樺島忠夫・寿岳章子(1965)の項立てにしたがって特徴を探っていく。

### (1) 名詞の比率(%)

名詞の比率は51.2%であった。名詞の比率が高けれ

ば、新聞に代表されるように淡々と事柄を列挙する叙事的傾向も強まるが、樺島らの提示するスケールに照らせば、まさに標準そのものの値といえる。

## (2) MVR

文の成分としての修飾語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）の比率は93語13.4%を占める。樺島・寿岳（1965）は「100×形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の比率／動詞の比率」で求められるMVRという指標を用い、名詞の比率との相関から、MVRが小さくて名詞の比率が大きければ要約的な文章、MVRが大きくて名詞の比率が小さければありさま描写的な文章、MVR・名詞の比率ともに小さければ動き描写的な文章と認められるとする。また同書では、「名詞の比率が大きい作品はMVRが小さいという負の相関がある。」と指摘する。「千年の釘にいどむ」におけるMVR値は41であり、普通だがやや小さめの値であることから、やや動き描写寄りの文章だということになる。従って、文章の骨組みを概括的に示す要約的な文章というよりは、むしろ描写的表現であり、単に様子などのありさまを描写するのではなく、人物の行動や物事の変化などを追っていく叙述であることがうかがえる。

## (3) 指示詞の比率 (%)

いわゆるコソアことばの比率だが、直前までの文脈における語句を指し示すとともに同語の反復を避け、また意味内容上文と文との接続を助けるという意味において、接続詞に準ずる働きもする。指示詞数は17語、自立語中における比率は25%でふつうよりやや小さい値であり、このことから文脈への依存度が低く、必ずしも冗長的とはいえず、前項とのかかわりでいえば職人の行動描写など動き的な描写にスポットライトを当て、無駄なく要点を叙述した文章だということになる。

## (4) 字音語の比率 (%)

和製漢語も含めた音読語の比率であるが、この数値が高ければ、文章のもつリズムはきびきびとした骨太のものとなる。また字音語が増えれば、文章の難度は上がることになる。本文中では「東塔」「砂鉄」ほか「それ以上になると」なども含めて106語、総語数に

占める比率は15.3%で、若干、低めの数値といえる。これは語りの文体ゆえ、和語を基調とすることによるのであろう。

## (5) 文の長さ (文に含まれる自立語数)

1文中に含まれる自立語数を指標として文の長さを測る。これは文節数と置き換えてもよいが、単に実質的な意味をもつ自立語を量的に把握しているだけで、文の構造が単純であるのか複雑であるのかなどについては顧慮しない。「千年の釘にいどむ」は長短のぶれの大きい文章であるが、6.6という値が得られた。文長としてはかなり小さな値であり、これも語りの文体であることに起因するのであろう。ひとつの文にひとつの事柄をとの鉄則を守り、子どもにも分かりやすい文の構成を志向した結果とみられる。

## (6) 引用文の比率 (%)

本文中に括弧でくくられた会話文、会話でなくとも行変えがなされたり、括弧で括ったりして引用であることを明示的にしているものも含めた比率である。「引用文の文字数×100／総字数」により求めた数値は7.2である。やや少ない数値で、どちらかといえば説明型の文章であるといえよう。この項目は、文学的文章においては有意性をもつかもしいないが、そもそも引用文が少ない説明・論説的文章における有効性については検討の余地を残す。

## (7) 接続詞をもつ文の比率 (%)

指示語の比率で文脈への依存度のことに言及したが、特に文頭に現われる接続詞は、まさに文と文との論理的関係を構成するものとして重要な指標となる。もちろん接続詞を用いなくとも、自明の順序で文を配列したり、同語・同表現を繰り返したり、指示語によって直前の文の意味内容を指示したりすることによっても、文と文との接続は可能である。むしろ論理性を嫌い、抒情性を重んずる文学的文章では、接続詞を用いない接続を志向するだろう。接続詞は、「このパンは、香り高くしかもおいしい。」など文中に用いられる可能性も考えると、単純に語数を求めただけでは、文の長さによって誤差が生ずる可能性もある。そこで文長の影響を受けにくい全文数における接続詞をもつ文の値を求めると、全88文中、接続詞をもつ文は16文あり、

比率は18.2%となる。

**(8) 現在止めの文の比率 (%)**

現在止めの文は、動きのある臨場感あふれる文となる一方で、過去形止めでは、絵や写真のように静止した落ち着いた静かな印象を聞き手や読者に与える。たとえば、時代小説などでも臨場感あふれる生き生きとした描写が求められる場合は、歴史的現在という手法が用いられることはよく知られている。そのほか、文末を曖昧化したり体言止めの技法を用いたりする場合もあるが、ここでは現在止めの文に限ってその比率を求めた。現在止めとして集計したものには、一般動詞の現在形、形容詞終止形ほか、「ている」「である」「である」「がある」「のである」なども含めてある。全88文中、38文が現在止めとみられ、43.2%を占める。

**(9) 色彩語の比率 (%)**

色彩語は修飾語として叙述を細やかにする。色彩語の使用度数が高ければ、聞き手や読者の脳裏に浮かぶイメージは原色豊かな油絵のように色鮮やかなものとなる。ただ、「千年の釘にいどむ」においては、色彩語は全く用いられていない。この項目は修飾語の比率との関連性が強い。また、内容の抽象度も高いため、色彩をとともなうイメージは喚起しにくいかもしれない。

**(10) 表情語の比率 (%)**

オノマトベに「じっと」「そっと」「はっと」「ぐいぐい」など擬態語出自でなさそうでも様態を写すものを表情語として一括し、その比率を求めた。「千年たってもびくともしない」「釘の本体はヒノキにびったりとくっつき」「ぐるりとその節をよけて曲がった」など4語で5.8の値が得られた。表情語と称されるものは、オノマトベに、出自は必ずしもオノマトベでなさそうでも機能的に同じものを含めるが、その基準は分かりにくい。副詞の比率といってもよいかもしれない。

以上、有意な関連性をもつ諸種の観点から計量的に見てきたが、それらの数値の意味するところを評価的に見ていくために樺島らの提示する5段階尺度を参照したい。樺島・寿岳(1965)によれば、「評語は『極めて小、小、普通、大、極めて大』の五つである。『極

めて小』『極めて大』それぞれの段階に入る作品の出現率は母集団出現率10パーセント以下である。『極めて小・小』『極めて大・大』の段階に入る作品の母集団出現率はそれぞれ30パーセント以下である。表に記した数字は五段階の境界を示す値である。」とされる。これによって「千年の釘にいどむ」を評価すれば、次のようになろう。

項目	値	評語
名 詞	51.2%	普通
M V R	41	普通(小さめ)
指 示 詞	2.5%	小
字 音 語	15.3%	小
文 長	6.6	極めて小
引 用 文	7.2	小
接続詞をもつ文	18.2%	普通(大きめ)
現在どめの文	43.2%	普通(大き目)
表 情 語	5.8%	普通(小さめ)
色 彩 語	0.0%	小

評 語 出現率	極めて小	小	普通	大	極めて大
	10%以下	30%以下		30%以下	10%以下
名 詞 %		45	48	54	56
M V R		34	41	55	65
指示詞%		2.1	2.8	5.0	6.0
字音語%		13	16	26	31
文 長		7	9	14	18
引用文%		1	8	30	70
接続詞を持つ文%		3	7	21	27
現在止%		3	13	47	76
表情語%		0.4	3.5	13.5	24.5
色彩語%		/	1.0	7.5	17.0

樺島忠夫・寿岳章子(1965)より

樺島・寿岳(1965)によれば「『普通』を六項目前後持つ作品が多」とするが、「小」との評語をもつ残りの項目は、ドキュメンタリーの語りを彷彿とさせるような話ことば体で、しかもリアルに伝えようとする表現効果をねらった文体の特性が現われている。指示詞も少ないことは、説明的であっても話しことばによるものであれば、回りくどいしつこさはないといえよう。文末が濃厚な聞き手意識に裏打ちされたデス・マス調をとらなかったことも、まるで男性の語り手が太く低

い声で淡々としたリズムで物語るような印象をもたらしているだろう。前稿でも触れたところであるが、テキストは「どう読むか」という以前に、文章そのものの内包する調子やリズムを見極める視点をもつことも必要であろう。

### 3. 語の重要度とは

前節で「千年の釘にいどむ」を計量的視点から概観してみたが、同じ日本語で書かれた文章であれば、むしろ極端な値を示すことは稀であるかもしれない。しかし、小さな要素の積み重ねにより、ある文体的特性をあぶり出すことが可能であることを見てきた。ここではそれを踏まえつつ、語の出現頻度や共起関係から語句や表現がどのような有機的相関をもつのか探ってみることとする。

まず、語の使用頻度をみていきたい。頻度3以上の語は、表1の通りである。自立語として使用頻度が高ければ、当該の文章における重要語と目されるのではないかと想定に立つものである。

語	頻度
釘	36
古代	14
職人	11
鉄	11
千年	10
白鷹	10
建物	7
節	7
ヒノキ	6
現代	5
薬師寺	4
かじ	4
純度	4
せんい	4
東塔	3
方法	3
頭	3
炭素	3

表1

表1をそれぞれのことばの意味分野に即しつつ整理してみたい。この文章のタイトル「千年の釘にいどむ」に照らしても、「釘」の頻度が36で最も高い。関連する意味分野で「鉄」の頻度が11、形状と材質にかかわって「純度」の度数が4、硬さを調整するために混合の度合いを変えて実験した「炭素」の頻度は8、形状にかかわって「頭」が3である。技術的模索に関わって「方法」という語の出現度数も3あった。また、「建物」の頻度が7、個別称である「薬師寺」が4、「東塔」が3、釘と並んで建築材料である「ヒノキ」が6、さらに「節」が7、「せんい」が4となっている。なお、題目の「いどむ」の主語である「職人」は12、うち5例は個別称の「かじ職人」、主人公である「白鷹」は10例あった。そのほか時間・時代を表わ

す「古代」が14、かじ職人白鷹さんの生きる「現代」が5、両時代をつなぐとともに、時空を超えた技術とその産物である建物や釘そのもののすばらしさを象徴する「千年」が10という結果であった。建物のことを問題としているようで、実は構成要素たる材木関連（ヒノキ・節・せんい）の頻度が17、話材の中心となる釘とその性質形状を合わせた語群が62となる。繰り返される語は素材として重要度が高いことは疑いなく、この文章は、明らかに微視的視点から描かれ、抽象度も高い内容といえる。

ところで、題目は本文のエキスにはかならないが、「いどむ」の頻度は題目に現われる1回のみである。題目が高度に要約的であるという点において、語のもつ重要度は本文のそれとは全く次元を異にするのであろう。したがって、学習のまとめでよく行われる、内容を振り返りつつ題目の意味を考えさせることは、題目に用いられた語、ひいてはその文章全体に書き手が込めた思いや意図を振り返り、再確認させる意味で重要な総括といえよう。

さて、語単独での頻度を踏まえうえで、同一文における共起関係に着目してみたい。

共起関係		頻度
釘	古代	8
	白鷹	7
	作る	
	現代	5
	作る	
	打ちこむ	
	釘	4
	純度	
	できる	
	節	3
ヒノキ	せんい	
薬師寺	塔	3
現代	古代	
	作る	
作る	方法	
千年	釘	3
	建物	
	思う	

表2によれば、もっとも頻度の高い「釘-古代」は、再建計画にかかわって、古代の建物を構成する素材も技術も高いことから説き起こし、その秘密に迫る調査を進めるにつれて、古代の職人のもつ技術の高さに驚嘆したことが発端となっているため、もっとも頻度が高いものと考えられる。頻度7を示す「釘-白鷹」「釘-作る」はもっとも頻度の高い「釘-古代」と対置され、千年の時を超え、現代の職人が古代の職人の技術水準に負けないものを作るために「いど

釘	調べる	3
	釘	
	ヒノキ	
鉄	頭	
	古代	
	現代	
純度	高い	
白鷹	作る	
ヒノキ	もどる	

表2

む]ことを象徴するものであり、以下、頻度5および頻度4のペアも白鷹さんが「いどむ」過程で釘づくりを様々な模索したプロセスを象徴するものである。実験における釘の刺さり方、節のよけ方などと釘の硬さなどとの関係の描写は、実に微視的で小学校教材として

読むことの学習を行なう際には邪魔になるほどの微細な情報が記述されている。しかし、そうした克明な描写は、古代の技術水準の高さを物語る際に写実性・信憑性を高めるために効果的であるともいえよう。

さて、文章の叙述をより細かく豊かにするのが、いわゆる修飾語の役割となるが、形容詞の使用頻度に着目してみると、頻度3の語は「高い」「かたい」で、

- こうして作られた鉄は、きわめて純度が高い。
- 純度の高い鉄は、さびにくい。
- 製鉄会社に相談して、特別に純度の高い鉄を用意してもらったことにした。

いずれも釘自体の材質にかかわるものである。頻度2は「すばらしい」「太い」「細い」「やわらかい」で、

- できた当時の薬師寺には、東塔と西塔、御本尊をまつる金堂、おぼうさんたちが修行をする大講堂など、七つのすばらしい建物が空に向かってそびえ立っていた。
- 千年も前のかじ職人たちは、歴史に名を残すこともなく去っていった。それでも、すばらしいことをやりとげた。
- 古代の釘は、よく見ると不思議な形をしている。先からだんだん太くなって、頭の近くになるとまた細くなっている。
- 太い鉄でできた釘が、生き物のように節をよけたのである。
- 少し細くなっている釘の頭のほうや、でこぼこしている先のほうは、打ちこんだときに釘とヒノキの間にわずかなすき間ができる。
- 釘は、かたすぎてもやわらかすぎてもいけない。やわらかいと、しっかりヒノキにつきささらな

いし、かたすぎると、木のせいや節をつぶしてしまう。

とあり、古代の建築物や技術に対する称賛、形状の説明、試行過程での釘の性質などの描写を助けている。

この文章の構造面に着目すると、形式段落で最初の5つが「はじめ」にあたる。冒頭で

- 千年先のわたしたちの周りはどうなっているだらう。
- あのビル、あのマンション、そして、わたしたちの住んでいる家々。きっと、かげも形もないだらう。

と問いかけと対応する答えとが示される。子ども向け文章では興味関心を喚起するために、よく用いられる手法である。体言止めも10か所あまり見られ、口語調でありながら印象をより深めようとする叙述上の工夫ともいえよう。

第6段落と第7段落は、「なか(1)」で、

- 「釘なんて、いつの時代でも同じではないのか。」  
そう考えるかもしれない。しかし、それはちがう。

問いかけ文の後に判断(不確実性)をあらわす表現を用い、すぐさま逆接の「しかし」と打ち消し文により、後続の内容をより強調する効果をねらっている。さらには、

- 写真の、古代の釘を見てほしい。これが釘かと思えるほどの大きさではないか。長さが三十センチメートルもある。それだけではない。材料の性質もちがう。古代の釘も現代の釘も、材料が鉄であることに変わりはない。

と語り掛け、問いかけの表現を用い、形状の違いを提示したのちに、いったん同じ鉄であるとの前提を示した後に、

- しかし、現代の鉄は、製鉄所で作られるときに大量生産と加工がしやすいように、いろいろなものが混ぜられる。つまり鉄の純度が低いのだ。これに対して、古代の鉄はどうか。

と逆接、説明の累加にはノダ文が用いられ決定的に質に相違があることを述べる。その内容を導くために、「これに対して」と呼応する疑問「か」で、古代の鉄とその鉄から作られた釘がいかに優秀なものであったかが導き出されている。

第8段落は「なか(2)」で

- どうしてこんな形になっているのだろう。白鷹さんは、調べてみて、おどろくべきことを発見した。釘と木材の関係だ。

疑問形式からはじまり、やや仰々しいが「おどろくべきこと」そして漢語サ変動詞「発見した」とし、その内容が「釘と木材の関係」であることを提示する。「見つけた」「見出した」に比べれば漢語サ変動詞「発見する」は硬く仰々しい表現となり、それだけ意味も強調されることになる。

第9段落、第10段落は「なか(3)」で

- 白鷹さんは、形だけでなく、釘のかたさにもひみつがあることを発見した。釘は、かたすぎてもやわらかすぎてもいけない。

やはり漢語サ変動詞「発見する」を用いつつ、話題の中心が「かたさ」であり、それは「ひみつ」という語で提示される。語は指示内容とともに語感も意味のひとつと考えられ、あることがらをあらわすのに、いくつかの表現方法があるなかで、なぜその語句や表現が選択されているかとの問いは、言語感覚を磨くうえでもっと教室でも考えられてよい問題であると思われる。さらに、

- するとこの釘は、おどろいたことに、節をわらないように、ぐるりとその節をよけて曲がった。太い鉄でできた釘が、生き物のように節をよけたのである。古代の職人たちは、ちゃんとこのことを知っていたのだ。

古代の釘が「生き物のように」という比喩のもたらす表現効果、釘の動きを描写するに挿入された「おどろいたことに」は、白鷹さんの試行錯誤を描くのであるから白鷹さんの視点から描いているようで、実は語り手の視点もそこに重ねられており、「のである」「のだ」とノダ文を重ねることで古代の職人たちの技量の高さを積みかけるように強調されている。

第11段落は「おわり」で、白鷹さんの行動描写が積みかけるようになされる。それは、

白鷹さんは、納得のいく釘を完成させるまで、何本も何本も作り直した。

薬師寺の工事が始まって、釘を宮大工の人たちにわたすようになってからも、改良を続けた。

そうして、これまで二万四千本もの釘を作ってきた。

それでも、白鷹さんは、もっといい釘を作ろう

としている。

と複合動詞の後項要素は「直す」「続ける」と動作が繰り返され、続くさまをあらわすものが用いられ、助詞「も」も並列的に累加しつつ、同種のもものが際限なく存在することを言外に暗示するような表現をとっている。「としている」は表題の「いどむ」同様に白鷹さんの職人としてのプライドに裏打ちされた確固たる意志が感じられる。後続する「千年も前のかじ職人たちは、歴史に名を残すこともなく去っていった。それでも、すばらしいことをやりとげた。この職人たちに負けるわけにはいかないのだ。」は語り手が白鷹さんの不屈の努力をノダ文で評価的にとらえなおし、さらに、

「千年先のことは、わしにも分からんよ。だけど、自分の作ったこの釘が残っていてほしいなあ。千年先に、もしかじ職人がいて、この釘を見たときに、おお、こいつもやりよるわいと思ってくれたらうれしいね。逆に、ああ、千年前のやつは下手くそだと思われるのははずかしい。笑われるのはもっといやだ。これは職人というものの意地だね。」

と、白鷹さん自身のことばで自らの営みの根底にある思いが語られる。自身のことばだけに、このセリフは重い意味をもつ。本文中では「笑う」という行動描写が白鷹さんの台詞に現れる「逆に、ああ、千年前のやつは下手くそだと思われるのははずかしい。笑われるのはもっといやだ。」と末尾の「白鷹さんは笑った。千年前の職人たちも、同じことを思っていたのかもしれない。」との2か所である。「笑う」に至った事情が本質的に異なることは言うまでもないが、「千年も前のかじ職人たちは、歴史に名を残すこともなく去っていった。それでも、すばらしいことをやりとげた。」との記述と「千年前の職人たちも、同じことを思っていたのかもしれない。」との語り手による推測は、ほかして余韻を残す叙述でありながら、かえって白鷹さんの仕事や生きざまを「職人の意地」として語り、屈託なく笑うという行動描写で対照的に描こうとしている点も印象的である。

文章の構造自体は、「はじめ-なか-おわり」との基本に沿ったものであるが、「なか」は「大きさや材質」「形状」「かたさと職人の知恵」に分けて詳述され、「建物(薬師寺、東塔と西塔、金堂、講堂など) > 職人と材料(宮大工・かわら職人・かじ職人) > 釘・木材の

繊維や節」と話材に当てるスポットライトを段階的に絞り、建物とそれを構成する材料との具体物から、職人の知恵と技という抽象的なものへと、しだいに微視的かつ抽象化された内容に先鋭化されていく。援用された挿絵のような微視的視点は、子どもがふつうに観察できるレベルのものではない。したがって、抽象度は高く、ひとつひとつの語句や表現の意味するところを丁寧にたどりながら、それが論旨を支えるためにいかなる働きをしているのか、丁寧に見極めていかなければならない。そして題目にもある通り、釘1本といえども、職人のプライドをかけたたゆまざる営みは、まさに白鷹さんが生涯かけていどんだものにほかならない。古代の職人の知恵とそれを解き明かそうとする現代の職人の挑戦、まさに微視的な情報に支えられて浮かび上がる職人のプライドと技、そして生きざまは、高学年の学習材としては軽く読み進めるだけでは惜しい素材であろう。

#### 4. おわりに

この文章は、和語中心であるため、いくぶんか柔らかなめのリズムでありながら、時に体言止めや問いかけ、台詞を交えるなど、ドキュメンタリー調を基調として、きびきびとした起伏のある語りの文体といえる。読み手に親しみを込めて寄り添うデス・マス調の文末を取らなかったことも要因としては大きいだろう。字数換算でいえば、平均して1文あたり25.9字ほどの文で構成されている。2節でも文に含まれる自立語数から文の長さを割り出し、かなり短いことをみてきたが、一般に名のある近代作家の文章の1文あたりの平均字数は30字台の半ば、またこれは大人が語りや読み聞かせを行なう際に息継ぎをせずに一息で読める字数とも符合するがそれよりも10字ほど短い。無駄のない明晰な表現で知られる小説の神様志賀直哉が、作品にもよるが1文あたり20字前後で綴っているのに近い簡潔できびきびしたリズムを内包した文体といえる。子ども向け文章では、「捕獲する」ではなく「捕まえる」とするなど、語の難易度を下げる意味合いから和語主体の描写になるうえ、

- 古代の職人たちは、ちゃんとこのことを知っていたのだ。
- そうして、これまで二万四千本もの釘を作ってきた。

と口語的語り口を示す語も散見される。「あのビル、あのマンション、そして、わたしたちの住んでいる家々。」ほか事実を淡々と説明していく文脈では「そして」が3か所で用いられ、「そうして、これまで二万四千本もの釘を作ってきた。」と職人としてのプライドに裏打ちされた優れた仕事に言及する場面で1か所だけ「そうして」が現われる。とりわけ語り手の思いのこもる文脈であるために口語性の強い表現が現われたのであろう。語り手の語りにそれだけ力がこもっているということである。

辞書的な語義の把握、文脈理解、適切な思考力や想像力の発露も読みを支えるが、文体のありよう、なぜ「見つけた」ではなく「発見した」と筆者は言いたかったのか。語はそれぞれ文体的価値をもって、そこにある必然性をもって配置されていることを大切にできれば、書き手や語り手の思いはもっと読み手や聞き手に届きやすくなるだろう。ことば漬けの学習は効率性や体系性に優れていても、学習者を飽きさせるだけである。日々の学習の中で漠然と感じた語句や表現、語り口などのイメージを拾い上げ、その都度、自分のことばで振り返ることができたなら、学習者の言語感覚は確実に磨かれていくといえるのだろう。

#### 文献

- 井上昭夫(2000)「相対成長式によるスギ同齢単純林における樹高曲線の解析」『日本林学会誌』82巻4号
- 遠藤仁・大谷航(2013)「小学校説明文教材の構造と表現に関する基礎的研究(1)」『宮城教育大学紀要』第48巻
- 遠藤仁・大谷航(2014)「小学校説明文教材の構造と表現に関する基礎的研究(2)」『宮城教育大学紀要』第49巻
- 遠藤仁・大谷航(2015)「小学校説明文教材の構造と表現に関する基礎的研究(3)」『宮城教育大学紀要』第50巻
- 遠藤仁・大谷航(2016)「小学校説明文教材の構造と表現に関する基礎的研究(4)」『宮城教育大学紀要』第51巻
- 遠藤仁・大谷航(2017)「ヒロシマのうた」研究(1)『宮城教育大学紀要』第52巻
- 遠藤仁・大谷航(2018)「ヒロシマのうた」研究(2)『宮城教育大学紀要』第53巻
- 大野晋・浜西正人(1985)『類語国語辞典』角川書店
- 樺島忠夫・寿岳章子(1965)『文体の科学』綜芸社、山口仲美編『論集日本語研究8文章・文体』(1979、有精堂)に再録。
- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver.1.0)
- 永野賢(1959)『学校文法文章論』朝倉書店
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 日本国語教育学会(2011)『国語教育総合事典』朝倉書店



- 林四郎 (1959) 「文章の構成」『言語生活』昭34・6 筑摩書房  
林四郎 (1987) 『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院  
林四郎 (1998) 『文章論の基礎問題』三省堂  
森岡健二 (1985) 『文章構成法——文章の診断と治療——』至文堂  
森岡健二 (1988) 『文体と表現 (現代語研究シリーズ5)』明治書院  
森岡健二 (1989) 『文章構成法』東海大学出版会

(令和元年9月27日受理)

